



昭和52年(1977年)

6月号(No. 384)

社団法人 日本山岳会

(J. A. C.)

定価一部 150円

目次

- 地図の整理法(今西錦司)……………(1)
- 茅ヶ岳行
——深田久弥七回忌記念登山——
(山下久男)……………(2)
- デュガール・ハストンを悼む
(片山全平)……………(3)
- 図書紹介……………(4)
- 地の果ての山々
山の天辺
日本山岳会昭和51年度事業報告……………(5)
- 昭和52年度事業計画(案)
昭和51年度収支決算書
財産目録
昭和52年度収支予算書(案)
- 報告とお知らせ
三月の山水会……………(9)
- 雪崩研究会……………(9)
- 講演と映画の夕……………(5)
- 会務報告・ルーム日誌など……………(11)
- カット/松本慎太郎・谷アユ子

地図の整理法

今西錦司

地図といえは国土地理院の五万や二万五千にかぎらず、すべて地球の表面を経緯度にしたがって分けた、一片の紙にしかすぎない。

た、のび放題にのびているからである。

タンザニアのアルーシャという町で、赤道が当地を通過しているという標示を読んだときは、いささか感に打たれたことを覚えていた。一枚の紙の五万が北緯にして一〇分間隔を保ち、東経にして一五分間隔を保ちながら、お行儀よく基盤目に並んでいることなどは、われわれの山登りからいったら、あまりエッセンシャルなこととも思われない。なぜなら、山も川も、およそ自然と名のつくものは、このような区画整理とは無関係に、好きな方向をとつ

だから、地図のまだないころや、あってもその存在がひろく知られていなかったころには、山川のたえずまいを唯一の眼当てにして、家を出れば、一ヶ月も半年も、さすらいの旅を続けた。地図がなければ自分で見取り図をつくらなければならない。松浦武四郎も小泉秀雄も、みなそのようにして歩いたのである。その実力をいまのものは持っていない、といわれるかもしれない。しかし、これはおそろくわれわれのうけた教育によるのであり、もっとひろくいえばわれわれの暮らしている生活環境のちがいに、その原因を求め

るべきであろう。地図もまた山へいったら、いまのわれわれはその非常識を咎められるのである。

た一連の地図に情が移っているため、別々の引出しへはなればならぬ。それには忍びないからである。

しかし、そのために飛んだ目にあうこともしばしばである。たとえばつぎの山行で、その一連の地図のうちの一枚だけが必要だったときに、うまくそれを探し出すことができるかどうか、という問題がある。とくにその地図がつかないにゆけばこの引出しにあるはずなのに、それがどうしても見つからぬ。結局引出し二つを風つぶしにさがして、いらいらしながら一枚の地図をはぐっていかねばならなくなる。なにしろ、右書き時代の地図を、おおかた揃えていたところへ、あらたに左書き時代の

地図が発行されたのだから、地図が多すぎるのである。どの引出しも、すでに地図で一杯なのである。私はさきにもいったように、八ツ折りにして山へもっていった地図を拡げ、一枚にして引出しに入れていたのだが、その他に台帳というか台地図というか、山へは絶対にもってゆかない、そのうえに各山行の赤線を集積した地図がある。山へ持っていったり、八ツ折りにして書物のあいだにはさんだりすることが、紛失の原因であるとすれば、これほど紛失のおそれのない地図はないであろう。それでもこの台地図さえ、一枚紛失したことがある。だから地図のよき整理法を案出してくれる人がないものだろうか。

ここに紹介する整理法は、私の案出したものでなくて、じつは地図屋の受け売りなのである。ご承知のとおり、昔の右書きの地図にはきまつてその右肩に、その地図の所属する二十万分の一図の名称と、その何枚目の地図であるか(共十六面のうちの何号であるか)が銘記してあった。たとえば五万の「京都東北部」なら「五万分一地形図京都及大阪二号(共十六面)」というように。地図屋はこの番号どおりに地図を整理してお

山をきれいに コシは持ち帰ろう

くのである。これならまったく機械的な処理であって、どこにも情のはいるすきなどない。

そのかわりに、この処理法だと、一枚の地図が南北には接続しても、東西にはどうしても接続しない。四号と五号とか、八号と九号とかは、この東西を連絡する役目を帯びている、といえないこともないけれども、地図としては四号と五号では、接続するにも接続の仕様がなない。あまりにも地域的にかけはなれすぎているからである。ところで、山も川も、およそ自然と名のつくものは、このよう

な人工的な整理法とは、もともと無関係であり、無関係に大地の上をのさばっている。したがって一枚の地図、たとえば六号は、南北両面の五号と七号と関係のあることはもちろんだが、それと同時に東西両面にあたる二号と十号とにつないでみる必要が生じてくるのであって、いずれにしても、一枚の地図で事足りるというものでもないし、南北をつないだからよいというものでもない。

つまり、一枚の地図は周辺のどの地図とも関係をもつことができるのであり、この関係を重んずるあまり、私には地図を整理しようと思っても、それがなかなかできなかつたのである。しかし、台地図が一枚行方不明になったのを機会に、十五の引出しに納まった地図を全部引っぱりだして、いわゆ

る地図屋式整理法に改めることにした。そのためまる三日間かかったけれど、これでもう地図をなくするようなこともあるまい。実をいうと、これでどうやらひととおり機械的な整理ができたのであるが、さてこれからスムーズに事を運ぶためには、いままではにない苦勞も味あわねばならないことが、わかつた。

まず、二十万分ノ一「宇都宮」の九号が、五万の「足尾」で、この足尾は五万の「鴻巣」と五万の「桐生及足利」のあいだに、入れておかねばならない、ということである、つまり、これからは五万の「地図名」をやたらに覚えねばならないとともに、またその五万の引出しの中における正しい位置を、国土地理院発行の「地図一覧図」によって、覚えねばならないということである。さいわい一覽図の方は同所の武田満子さんが、新しい版のできるたびに送ってくれるので、心配しなくてもすむが、それにしても国土地理院は五万の名称を勝手にかえるので困る。たとえば右書きのときは「鬼首」であった五万が、左書きになったとたんに「秋の宮」に変わる

ことなどは、ざらである。けれども地図屋のアルバイトの若い男が、アツという間に所望の地図を引っぱり出してくることを思えば、これはそう悲観したことではないであらう。

こう書きながら私は驚いているのである——この地図の整理法の改正が、意外におそく、私の晩年に訪れたということを。これはどうしたことであろうか。おそらく地図の出し入れがばいしいあいだは、たとえ情が移らないにしても、整理がおくれ、大事な地図をなくする機会も、また多かつたのであろう。いまはもう登るべき山もおのずから限定され、大部分の地図はふたたび山へお伴することもない。そこで私は図書館におけ

茅ガ岳行

——深田久弥七回忌記念登山——

深田さんは昭和二十二年九月、越後湯沢から加賀大聖寺町仲町に転住、同二十六年三月、金沢市に転居されるまでおよそ三年半、故郷に在住された。その間にはつしほ句会という俳句会と、錦城山岳会とを興された。

句会の方は毎月例会の他に芭蕉忌を例年修し、深田さんが亡くなられた後も続行、二十八回に及んでいる。さらに深田さんなきあとには、その俳号をとって、毎年春の彼岸の三月二十一日に、九山忌と称して忌を修し、句会を催している。深田さんが茅ガ岳山上で急逝されて早くも満六年を経、七回忌が修せられ、句会も催した。それ

る書物の整理法というものを考えるのである。莫大な書物数とこれにたいする僅少な利用者。そこに書物の整理法という一種の約束ごとが生まれてくる。大役を果たした地図たちに、これで一種の安息所を与えることができるのなら、約束ごとであらうとなんであろうと、これもまた老兵にとつては、ひとつの功德にかなえられて、よいものではなからうか。

(一九七七一三三〇)

山下久男

を記念して、茅ガ岳に登り、深田さんの冥福を祈ることとなった。東京からは志げ子夫人、二男沢二君ら四名、地元山梨から日本山岳会員山村正光、田村英也の両君。金沢から豊原月右、森田一水、二口静枝、藤浦昭代さん、大聖寺から市原聖城子、林長明の二君と私とが参加。

私たちは四月二日、穴山温泉能美荘に一泊した。この宿に、昭和四十六年三月二十日に藤島敏男、深田久弥、山村正光氏ら七名が泊り、その翌日一行は茅ガ岳に登られたという。この時山頂近くで深田さんは脳卒中で急逝されたのである。

三日、七時二十五分この宿をあとに、茅ガ岳山麓へ車を走らす。山麓には多くの茅が立ち枯れてそのままだになっている。落葉松の中の道に入ってゆく。霜柱が踏まれるとさくさくと音がして、白く足もとで崩れる。春でもこの辺では霜柱がたつのである。女岩についてのが九時十五分。そこでゆっくり休憩。岩間からしたり落ちる清水を何杯も飲んだ。

深田さんがアンパンをたべられたところで、山村さんから当時の様子をきく。そこからの五分も登ったところが、深田さんの倒れたところ。

十時三十五分。私たちはあかもそこに深田さんが居られるかの如く、その場を取り囲み、持参の紅椿、山桜、みやこわすれ、雪柳、紫金草、菜の花、黄水仙、ストックなどを飾り、お好きだった酒やビールや、金沢から持参のちとせやアンパンを供えた。ある者は先生と声をあげて呼び、ある者は数珠をまさぐって念じた。そこにいる者、ひとしく頭を深くたれて御冥福を祈ったのは言うまでもない。その時は山村君と深田さんとの間にイワカガミについての言葉が互いに交わされたという。それが深田さんの最後の言葉となつたのである。私たちは十一時五十分まで三十分間、そこで山村さんの話をきいたり、深田さんのありし日のことを偲んだりした。

そこから十五分ほどゆるい頂上への道をゆっくりのぼると、もうそこは一七〇四メートルの茅ガ岳の頂上だった。十一時二十分。北西に八ガ岳が白く、西南に、鋸山、駒ガ岳、アサヨ岳、地蔵ガ岳、観音ガ岳、葉師ガ岳と続き、これらの背後にさらに高く三〇〇〇メートル級の山々が白い。その南に塩見岳、荒川岳、赤石岳。東南に富士山が雲表に麗姿をみせていた。北には秩父の山々がつらなっている。この山の四面すべて山また山。甲斐の国だけのことはある。山梨と山無にかけて、山なしというのにこんなに山があるのはいかにとユーモアたっぷり言う者もいた。加賀の白山は北岳にのぼると晴れた日にはよく見えると地元の人山岳通が語ってくれる。地図と山々とをみくらべてその位置を念入りに確認しているのは月右君。深田さんはこの山上からきつと四辺の山々を眺めて、あの山はいつ登ってこうだった、その山の場合はああだったとさぞ語りたかったであろうのに。たった十五分で頂上に到達出来たのに。ああ、そして楽しい思い出を山の仲間たちに存分語ることが出来た筈だったのに。私たちはこれらの山々を前に、木の小枝を手折って、箸の代りとして昼食をゆっくりとった。この山にはミズナラ、ブナ、カエデなどが多いと山上の説明板に書いてあったが、それらは山腹に多

いらしく山頂近くにはツツジが随分あった。これらの花盛りの頃にはきつと見事だろうと私は思った。頂上に高さ五メートルほどの木の櫓がある。岩手県栗石町出身の若い谷地君が、この櫓に上ると登った。何を始めるのかと思つたら「デンセン踊り」という珍しい踊りを披露した。加賀勢から誰か何かをと私は思った。聖城子君がいるではないか。聖城子君に話を一つとすめた。聖城子君は櫓の上に正座して「鞍馬」を朗朗と謡った。「聖城子、うまいなあ」と深田さんはきつと賞められたであろうと私は思った。

頂上からやや降りたところに「故深田久弥先生追悼登山」、昭和五十年十二月七日、東京都杉並区役所山岳部と記した木標が建ててあった。十二時十分、名残りを惜しんで私たちは下山の途についた。山村君は深田さん永眠の地から、山麓の柳平村の西野氏(電話のある家)まで四十五分で当日駆け足気味に走り下り、急を警察と東京の深田家、及び地元の山岳会支部に連絡されたという。私達は山麓から車で葦崎駅に出た。深田しげ子さんたち四人は車で東京へ、私たち七人は山村、田村両君にこの駅で見送られ、厚く礼をのべた。途上、梅と桃の花ざかりの甲斐路をぬけ花のさかりの武蔵野をへて東京へと出た。

(昭和52・4・11稿)

デュガール・ハストンを悼む

片山全平

デュガール・ハストンが遭難死したのは一月十七日だった。雪崩に埋没死したという速報だけに止まり、その詳報を待っていたが、結局は単独スキー登山であり、死の詳報などあり得ないと気付いて時機を失した感じだ。しかし小西政継、植村直己両氏の山仲間でもあり、彼の側面的な生涯を記してとむらいたい。

タイムズ紙によると、ハストンの友人ALAN・RANKIN(カナダ)をLEYSIN(ハストン経営の国際登山学校所在地)のホテルに残して、単独、RIO NDAZ(六五〇〇フィート)にスキー・リフトに乗って出かけ、登頂後、LUISETS峠に向けて滑降する予定だったという。

ホーム・グラウンドだが、このコースは、豪雪後は雪崩の危険のため立ち入り禁止地域に指定され、これを無視したことになる。その夜五十人の救助隊と、雪崩犬六匹が出動、夜十時ごろデブリを発見、徹夜の捜査が続けられていたが、死体発見は翌十八日午後であった。約六フィート下に埋っていた。

× ×

ハストンは一九七二年「IN HIGH PLACES」、七四年「ON THE EIGER」の二書を出版、最近は小説を完結したという。エベレスト南西壁登はん後は、まったくのスタージェムにのし上がり、TV関係、記録映画、またアイガー北壁の映画ではクリント・イーストウッドの代役を演じるなど多忙の身だった。一メートル八三のヤセ型。眼窩

はおち込み、ニヒルな顔つきは、エジンバラ大哲学科(中退)の学生にふさわしい風貌だった。チャングバン遠征の際もニーチェの哲学書を耽読していて、中退こそしているが「彼の生涯のテーマを放棄したわけではなく、ニーチェへの取り組みのなかに、その動機となる基本的な思索の糸をたぐるこことができる」と「チャンガバン」でポニントンは記している。

初期、若手で作ったエジンバラのクライマーに属し、ここでROBIN・SMITH、JIM・STENHOUSE、ANDY・WIGHTMAN、GRAHAM・TISO、MARSHALL兄弟

日本風景論

初版完全覆刻

志賀重昂著 ■別冊解題/A5判一五〇頁

■内容見本呈



■別冊解題

I父の横顔/志賀富士夫II解題・山と日本風景論/山崎安治III評伝・志賀重昂と日本風景論/猪瀬直樹その他
■近代の視座にたつ自然観照と山と登山を論じた先駆的名著。
定価四五〇〇円

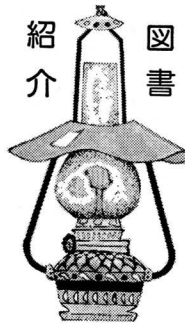
鳳出版

東京都文京区本郷3-32-5中川ビル 電話811-5117 振東4-154867

の知己を得る。二回目のアイガー北壁でワイトマンの足首骨折から決死の脱出をはかり、三回目の同北壁の挑戦で英人による第二登を果した。

が、一九六四、六五年に登山学校計画で、自動車事故を誘起、一死者を出して二カ月の刑務所暮らしとなったが、この罪は生涯消えず、以後自動車には手を出さな

図書紹介



地の果ての山々

クリス・ボニントン著
山崎安治訳

既に、朝日新聞、毎日新聞をはじめ山岳雑誌などに紹介されて、好評を博している本書の紹介をするよう依頼を受けてから、時間がたってしまった。

ボニントンの文章は比較的読みやすいといわれるが、訳書でこれほど読みやすい本はめずらしい。訳者のこねた文章化は、随所にその表現の妙がにじみ出ている。本書はボニントンの著書では、

ったことが、彼の自叙伝にはない部分として「マウンテン」誌に取り上げられている。

このあとアイガー北壁のディレティシマを完成。ハリリンを失うが、これが国際的なクライマーの地位を築き、アンナプルナ南壁、エベレスト南西壁に結び、最近近はK2の計画も具体化していた。

一九六六年「I chose to climb」(邦訳「わが青春の登攀」青柳健訳三笠書房)

一九七一年「Annapurna South Face」邦訳「アンナプルナ南壁」山崎安治訳白水社)に続く三冊目のものである。

記者は、あとがきで次のように記している。

「山登りに関する書物は洋の東西を問わず随分多く出ているし、訳者もかなり眼を通していろいろであるが、本書は、これまでの山の書物にはない極めてユニークな内容が盛り込まれている。ひと口に言えば、本書は単なる登山記ではなく、それぞれの登攀、あるいはアドベンチャーを通じて、アドベンチャー・ジャーナリストという全く新しい分野に突入し、それを開拓した、たくましい山に生きる男のヒューマン・ドキュメントである」と。

四十二歳のボニントンは、既にご承知の通り、現代英国を代表する

る世界のトップ・クライマーでもある。

山を主題にアドベンチャー・ジャーナリストとして生き抜こうと決意はしたもの、本当にやっけてゆけるのか否かという不安と苦悩を浮き彫りにしながら、彼を取り巻く現代英国を代表する第一級のクライマー達の競争心や友情に支えられて、今日の地位を築くまでの自伝ともいえる。

次々と声のかかる登攀企画や遠征計画へ参加する際の心理状態の記述と共に、登場する現代欧米の岩場の巨匠達の横顔を紹介するくだりは、さながら現代クライマー伝の感があり、日頃日本ではほとんど知られていない英国のクライミングの現状を知る上で極めて興味深い。

登攀の記録にしろ、遠征の紀行にしろ、あくまで人間の織りなすドラマという観点に視点を定めて書いているので、単調な登攀の描写や、遠征記録に退屈さを感じさせない。

これは、個人的な手記という手軽さにもよるが、彼の常に世界の第一級のクライマーたらんとする一流主義の精神が底流にあることも見逃せない。

しかし、時として、ライターや写真家の立場に徹しようと試みたりしながら、山と人生について触れ、特に愛する妻ウェンディとのやりとりなどは、非常に情感あふ

売場ご案内

最新入荷及び好評の本

- ★カンピレ・ディオール登山報告書(広島山の会カラコルム・ヒマラヤ登山隊1975) 2,000円
- ★1976 Report From Mt.Mckinley(広島山岳連盟)1,000円
- ★セントラル・ラホール地区トレッキングの記録—1975—(北里大学山岳部ムルキラ山群調査隊)720円
- ★南アルプス大武川廻行記録集(紫山岳会) 1,700円
- ★夕張日誌(松浦武四郎著丸山道子訳)680円
- ★天塩日誌(松浦武四郎著丸山道子訳)600円
- ★十勝日誌(松浦武四郎著丸山道子訳)680円
- ★日本名山図絵—谷文晁—(小林玻璃三編) 2,000円
- ★淡彩画絵はがき—北海道の山・原野・花—(坂本直行)1集・2集各6枚1組 300円

茗溪堂

＜山の本の売場＞ お茶の水店 三階
営業時間平日・午前10時30分より午後8時
日曜祝日・午後0時30分より午後6時30分

れる文章となっており、これまでの山の書物には見られなかったものである。

今後、日本においても、この種の山の書物の出現を期待してやまない。

本書に登場する地域は、パタゴニア・アルプス、エクアドル、北極圏カナダ、フンザ王国、青ナイル河、ネパール、英国の岩場と広範な地域に及んでいる。

なかでも、アイガー北壁の冬期初直登については、カメラマンとして参加した著者の目から見た内幕は、迫力ある読みごたえのあるもので、その計画の立案者であった「金髪的神様」ジョン・ハリーソンとの出会いやその悲劇的な最

後、激しい嵐の中で生きのびるチャンスなど全くないような魔のフエースを登攀すべく、八週間も強烈な戦いを続ける英国とドイツのクライマー達の描写は生々しい。

本書の最後にはのべてあるエベレスト南西壁への登攀については、世界の巨大な壁を登攀する着想を持ち、アンナプルナ南壁で成功して以来、次のより挑戦的な登攀は、当然に、エベレスト南西壁でなければならなかった。

気心の知れたクライマーを中心に編成して挑んだ一九七二年秋のエベレスト南西壁は寒気と烈風にたたかれながら、八三〇〇メートルで敗退したが、彼の第四冊目の著書に当たる「EVEREST—South

West Face」には、「幸運に恵まれれば必ず登れるという確信を抱いた」と記している。

そして、一九七五年秋、彼の率いた英国エベレスト南西壁登山隊は「その確信」に再度挑戦して、見事南西壁を抜けて頂上に立ったのである。ここに世界の登山史に輝かしい大記録を書き加えた。報告書「EVEREST-The Hard Way」(邦訳「エベレスト南西壁—英国隊初登頂の記録—」大浦暁生・平林克敏共訳、集英社)もまた好評を博すものと思われるが、この大記録の真随を理解する為にも、ぜひ、本書を推薦する。

昭和五十一年十二月十日、時事通信社刊、四一〇ページ、定価二五〇〇円 (山本良二)

講演と映画の夕

—探検の先駆者たち—

△映画△

☆明治の極地・白瀬南極探検隊の記録 1時間半

〓明治43〜45年撮影のフィルム、樺太犬の訓練—出発前日の隊員たち(大隈重信邸内)

〓乃木將軍から寄せられた激励の手紙—決別式(芝浦埠頭)

〓南極鯨湾に到達した開南丸—アレキサンダー山頂めざし突進する隊員〓

☆積雪期北アルプス初縦走—後編〓昨年の「探検の先駆者たち

山の天辺

赤沼千尋著

で、大正という時代を知るためにも、有用な資料となるであろうと思われる」と書いてあるように、きわめて貴重な秘話が随所に出てくる。

燕山荘の経営者として知られてゐる著者の随想集である。序文で浦松佐美太郎氏が「あるいは人によれば、勝手なことを書いたものだといふかも知れないが、それが山人らしいところで、その天真爛漫ぶりこそが、貴重なものでありそこに面白さがあるのだ。殊に大正年間の登山については文章は、今日の多くの人々には想像することもできないようなことばかり

ちい」で前半を映写、好評を博したものの後半。解説・山崎安治氏、1時間〓

☆講演 南極の話 西堀栄三郎氏

日時 7月13日(木)午後6時

場所 東京千代田区公会堂

入場料 五〇〇円

申込み 日本山岳会事務局・集

会委員会

〓注意 前もって入場券をご購

入ください。

日本山岳会 昭和51年度 事業報告

1 登山の指導と奨励に必要な集会、講習会および展示会の開催

(1) 集会

・4月24日 支部長会議(本会)

・6月6日 第30回ウェストン祭(上高地)

・6月12日〜15日 現地小集会(白山、他)

・6月21日 第三三四回小集会・北極単独行報告 講師・植村直巳氏 (東京・さくらビル)

・7月20日 第三三五回小集会・カモシカ同人 ダウラギリ四峰報告 (本会)

・9月2日 第三三六回小集会・日本山岳会ナンダ・デヴィ縦走報告 (東京・朝日講堂)

・9月9日 第三三七回小集会・スケッチ教室① 講師・山里寿男氏 (本会)

・9月16日 第三三八回小集会・スケッチ教室② (本会)

・9月20日 第三三九回小集会・日本山岳会 アヴィガミン報告 (本会)

・9月22日〜23日 第三四〇回小集会・スケッチ教室③ (八ヶ岳山麓)

・10月2日〜3日 第三四一回小集会・集中登山 (谷川岳)

・10月5日 第三四二回小集会・各国山岳会情報 講師・近藤等氏、鈴木郭之氏、田村俊介氏、松沢憲夫氏、吉沢一郎氏(本会)

事業報告

・10月8日 第三四三回小集会・山岳同志会ジャスナー報告 (東京・さくらビル)

・10月20日 第三四四回小集会・会員会議 (東京・湯島会館)

・10月23日 山岳図書交換会 (本会)

・10月25日第三四五回小集会・神奈川県岳連ローツェ報告(本会)

・11月10日 第三四六回小集会・芝浦工大 バルトロカンリ報告 (本会)

・11月21日〜23日 第三四七回小集会・登山技術講習会 (富士山五合目)

・11月30日 第三四八回小集会

1977 ALASKA, CANADA, U.S.A.

ヨセミテ・バックパッキングとMade in U.S.A.

8月7日(日)〜8月15日(月) 9日間¥320,000(全食付)

カナディアン・ロッキーズ氷河の峰登頂

8月5日(金)〜8月13日(土) 9日間¥370,000(全食付)

他にアラスカ氷河の峰、マウント・レニア登頂、冒険旅行など

企画 横山ロッキーズーツーズ 〒112 東京都文京区後楽1-1-17 電話 03-815-9273 主催 山本良二 協賛 日本山岳会 一社登録第1号

昭和 51 年度 収 支 決 算 書

自 昭和51年 4 月 1 日
至 昭和52年 3 月 31 日

1. 総括表

区 分	歳 入 決算額	歳 出 決算額	差引残高	差引残高の処理 基本財産翌年度へ の繰入の繰越
一 般 会 計	円 33,375,306	円 25,261,591	円 8,113,715	円 8,113,715
別 途 会 計	4,280,000		4,280,000	4,280,000
(基本財産編入 引 当 金)		(2,430,000)	(2,430,000)	(2,430,000)
(別途会計編入 積立金引当金)		(1,850,000)	(1,850,000)	(1,850,000)
合 計	37,655,306	25,261,591	12,393,715	12,393,715

2. 一般会計 (歳入)

科 目	予 算 額	決 算 額	増減(△)
経 常 収 入	円 21,250,000	円 24,854,725	円 3,604,725
入 会 金	2,250,000	2,430,000	180,000
会 費	19,000,000	21,443,009	2,443,009
過 年 度 会 費		731,716	731,716
次 年 度 会 費		250,000	250,000
終 身 会 費			
事 業 収 入	6,211,000	5,867,470	△ 343,530
広 告 料	1,225,000	954,000	△ 271,000
山 日 記 印 税	456,000	380,000	△ 76,000
そ の 他 印 税	2,230,000	2,728,365	498,365
刊 行 物 売 上	500,000	261,937	△ 238,063
そ の 他 事 業 収 入	800,000	520,100	△ 279,900
山 研 使 用 料	1,000,000	1,023,068	23,068
雑 収 入	1,100,000	1,513,210	413,210
利 息	300,000	467,944	167,944
山 岳 診 療 助 成 金	500,000	500,000	
そ の 他 雑 収 入	300,000	545,266	245,266
未 収 金	360,750	360,750	
刊行物等売上未払金	360,750	360,750	
小 計	28,921,750	32,596,155	3,674,405
前年度からの繰越金	779,151	779,151	
一 般 会 計 合 計	29,700,901	33,375,306	3,674,405

(歳 出)

科 目	予 算 額	決 算 額	増減(△)
運 営 管 理 費	円 14,430,000	円 13,930,009	円 △ 499,991
手 当	3,300,000	3,176,960	△ 123,040
文 具 費	120,000	104,305	△ 15,695

印 刷 費	1,000,000	1,075,230	75,230
交 通 費	800,000	531,040	△ 268,960
通 信 費	2,400,000	1,822,750	△ 577,250
家 賃 費	4,900,000	4,914,960	14,960
保 険 料	40,000	48,150	8,150
営 繕 費	250,000	192,840	△ 57,160
諸 税 会 費	130,000	137,213	7,213
光 熱 費	330,000	850,647	520,647
電 話 料	200,000	225,625	25,625
会 議 費	50,000	37,194	△ 12,806
交 際 費	150,000	115,190	△ 34,810
備 品 費			
振 替 料	140,000	131,445	△ 8,555
支 部 運 営 費	420,000	394,200	△ 25,800
福 利 厚 生 費	50,000	39,540	△ 10,460
雑 費	150,000	132,720	△ 17,280
事 業 費	9,635,000	6,320,182	△ 3,314,818
出 版 費	5,765,000	2,555,074	△ 3,209,926
図 書 費	300,000	227,187	△ 72,813
調 査 研 究 費	760,000	700,490	△ 59,510
指 導 費	680,000	692,479	12,479
海 外 諸 関 係 費	120,000	99,089	△ 20,911
名 簿 発 行 費			
山 研 運 営 費	1,510,000	1,498,063	△ 11,937
そ の 他 事 業 費	500,000	547,800	47,800
予 備 費	2,000,000	731,400	△ 1,268,600
基本財産編入引当金	2,250,000	2,430,000	180,000
そ の 他 引 当 金		100,000	100,000
別 途 積 立 金		1,750,000	1,750,000
小 計	28,315,000	25,261,591	△ 3,053,409
翌年度への繰越	1,385,901	8,113,715	6,727,814
一 般 会 計 合 計	29,700,901	33,375,306	3,674,405

3. 別途会計 (編入内訳)

科 目	繰 越	歳 入	歳 出	翌 年 度 繰 越
終身会費積立金	円 2,530,000	円 250,000		円 2,780,000
ルーム基金積立金	457,000	1,000,000		1,457,000
図書購入費積立金	40,000			40,000
退職給与積立金	350,000	500,000		850,000
合 計	3,377,000	1,750,000		5,127,000

4. 引 当 金

科 目	繰 越	歳 入	歳 出	翌 年 度 繰 越
基本財産編入引当金	円 2,430,000	円 2,430,000		円 2,430,000
洋書目録印刷費		100,000		100,000
合 計		2,530,000		2,530,000

- (3) 講習会
- ・ 5月22日、24日 第一七回登山技術講習会 (穂高岳沢)
 - ・ 8月8日、15日 穂高涸沢テン
- (2) 研究会
- ・ 8月31日、9月17日、10月21日、11月11日、12月15日、12月24日、2月2日 雪崩研究会 (本会)
 - ・ 2月26日 高所登山研究会 (東京新宿・住友会議室)
 - ・ 12月4日 支部長会議 (本会)
 - ・ 12月7日 第三四九回小集会 (京王プラザホテル)
 - ・ 12月12日 第三五〇回小集会 (東京・全電通会館)
 - ・ 12月17日 第三五一回小集会 (東京世田谷・知行院)
 - ・ 1月14日、17日 第三五二回小集会・スキー親睦会 (八方尾根中大山荘)
 - ・ 3月15日 山岳図書を語る夕べ (本会)
 - ・ 3月17日 山岳史懇談会・学習院山岳部 講師・加藤泰安氏他 (本会)
 - ・ 3月26日 第三五三回小集会・新入会員オリエンテーション (本会)
- 日本山岳会バミール報告

財 産 目 録

昭和52年3月31日現在

1. 基 本 財 産

種 類	預 入 先	金 額
貸 付 信 託	日本信託銀行 本店	1,780,000円
金 銭 信 託	同 上	422,238
貸 付 信 託	三井信託銀行 本店	3,000,000
金 銭 信 託	同 上	172,938
合 計		5,375,176

2. 運 用 財 産

1) 保 証 金

種 類	預 入 先	金 額
保 証 金	利根川商事株式会社	7,314,000円

2) 現金および預貯金

種 類	預 入 先	金 額
現 金		50,504円
普 通 預 金	三和銀行 本郷支店	4,911,861
	協和銀行 神田支店	229,379
	東京銀行 本店	19,831
定 期 預 金	三和銀行 本郷支店	6,000,000
	協和銀行 神田支店	4,000,000
振 替 預 金	東京振替貯金課	559,140
合 計		15,770,715

3) 建 物 (上高地山岳研究所)

場 所	長野県南安曇郡安曇村上高地国有林114い林小班
構 造	鉄筋コンクリート造(一部木造) 1棟 100.69 m ²

4) 未 収 金

摘 要	金 額
刊行物等売上未収金	360,750円
歳入決算額	△ 360,750
差 引 合 計	0

5) 刊行物・服飾品棚卸現在高

摘 要	金 額
刊行物 (山岳・山岳覆刻版等)	1,012,830円
服飾品、記念品 (ネクタイ・灰皿等)	1,586,480
合 計	2,599,310

6) 図 書

種 類	摘 要	冊 数
和 書	(51年度 受入冊数84冊)	3,436冊
洋 書	(" 29冊)	1,332冊

社団法人 日本山岳会 昭和51年 収支決算書及び財産目録を監査し、正確妥当なことを認めます。

昭和 52 年 4 月 7 日

社団法人 日 本 山 岳 会

監 事 太 田 敬

監 事 飯 野 亨

7) 什 器 備 品

宛名カードケース(1), 新刊書ケース(1), セフネス金庫(1), 宛名印刷機(1), ローヤルタイプライター(1), 電話(1), 雑誌棚(4), 折りたたみ椅子(27), 机・テーブル(17), スチール黒板(2), 両開書庫(8), ファイリングキャビット(6), マップロッカー(1), コンパック移動書庫(4), キーバー引違書庫(2), 移動式踏台(1), スチール書架(4), 組立用本棚(1), スクリーン(1), ホールスタンド(3), 手提金庫(1), 複写機(1), タイプスタンド(2), 電気冷蔵庫(1), 応接セット(1), 折りたたみ運搬車(1), 耐火金庫(1), テーブルコーダー(1), 卓上電算機(1)

8) 絵 画

・北穂高岳滝谷(足立源一郎, 油—25) ・北穂高岳 主峯(足立源一郎, 油—25) ・或朝の槍ヶ岳(足立源一郎, 油—25) ・槍ヶ岳(足立源一郎, 油—P 8) ・群狼(石井鶴三, 墨絵) ・鳥(石井鶴三, 墨絵) ・徳本峠から穂高連峰(石田吟松, 墨絵) ・富士山麓(茨木猪之吉, 油—A 25) ・伊豆半島(茨木猪之吉, 油—10) ・針之木峠(茨木猪之吉, 油—10) ・初冬の両神山(茨木猪之吉, 油—10) ・モンブランメールドグラス(シュラギットワイト, エッチング) ・北岳(高遠宏, 版画) ・白馬岳(中村清太郎, 油—A 50) ・田代池の白樺(中村清太郎, 油—変型 6) ・後立山連峯(中村清太郎, 水彩) ・槍ヶ岳初夏(中村清太郎, 油—10) ・ユングフラウ(山里寿男, 油—10) ・潤沢より北穂高(山里寿男, 水彩—6) ・カンチエンジェンガ(矢崎千代子, パステル画) ・ブカヒルカノルテ(源辺九郎, 水彩)

- ト集会 (潤沢、上高地)
・11月21日～23日 第一八回登山技術講習会 (富士山)
- (4) 展覧会
・2月28日～3月5日 山岳絵画展 (東京・丸善)
- 2 登山施設の改善、その他登山のための適切な事業
上高地山岳研究所を五月より一月まで開所、集会委員会、青年懇談会、婦人懇談会、指導委員会、高所登山委員会、図書委員会、自然保護委員会による研究会を開催した
- 3 山岳遭難の予防とその対策に関する企画および指導
各大学医学部、山岳部による夏山診療所開設(七月～八月)
(槍ヶ岳、五色沼、唐松、三俣山荘、白馬岳、合戦小屋、立山、尾瀬)
- 4 自然保護活動
・環境庁との連携を密にし、国立公園内における山岳地の自然保護への協力
・上高地、穂高岳沢一帯のクリーン運動実施(7月10日～11日、10月30日～31日 上高地集会)
- 5 海外登山の企画および指導
・インド登山財団とのジョイントで派遣したナンダ・デヴィ縦走隊は六月一五月初縦走に成功、カメット峰登山隊(女子隊)は六月一八日アヴィガミン登頂。パミール登山隊は八月七日コルジェニフスカヤ峰登頂、八月八

・昭和51年度除籍者氏名 (合計 106名)

会員番号	氏 名	支 部	会員番号	氏 名	支 部	会員番号	氏 名	支 部	会員番号	氏 名	支 部
1920	川崎 隆章	東 京	7086	杉浦 一	北海道	6076	小林 伸吉	静 岡	5902	矢野 鉄雄	東九州
3921	東京薬科大学 体育会山岳部		7154	橋本 心郎		5146	金岡 弘	東 海	5075	山代 末満	熊 本
4290	川堀 哲哉		7225	長谷川正弘		5179	南山 大 学		4325	秦野 一彦	その他
4550	堀川 一男		7231	安間洋一郎			南山 岳 部		4359	沖 弘二	
4625	大村 光雄		7335	桑原 繁弘		5531	木村 哲夫		4608	内野 幸男	
4625	大村 光雄		7394	半谷 実夫		5741	小栗 嘉浩	山 陰	4714	今村 芳治	
4812	塚越 茂樹		7402	榎本 匡伸		6037	名古屋商科大学 体育会山岳部		4744	江上 康	
5096	東京女子山岳 部山行会		7407	李 敏晃		7658	石本 恵生		5504	大久保慶三	
5303	小島 六郎		7433	飯牟礼昌子		7744	鈴木 克実	岐 阜	5837	佐藤 常明	海 外
5319	大山 孝征		7449	土田 紘介		7505	牧村 芳郎	石 川	6538	中村 博之	
5513	大瀬多喜子		7450	藤沼 祐司		6326	小島 三郎	西	6764	玉井 信義	
5648	小泉 義和		7614	横井 章		4414	神戸大 学 部		7013	浜 厳	
5800	米田 茂		7639	対馬 義正		4554	山 岳 部		7245	橋 喜代一	
5914	丹羽由紀夫		7640	五十嵐文典		5315	清水 昭		7429	伴 邦治郎	
5922	河野 信夫		7642	赤沼 八隅		5330	岩崎 春夫		7533	森田 武良	
5933	八島 晃		7681	北村 節子		5819	明石 貴雄		7917	磯脇 隆三	
5989	小山 勝司		7791	坂本 純一		6098	吉河 省三		6717	松田 久男	
6060	市川 邦治		7929	嶋 満則		6382	岩田 修造		6843	クラウルク A・原	
6106	鳴嶋 正吾		7936	佐々木信也		7095	鶴谷 将俊		7014	桑原 裕周	
6226	安藤 洋子		7947	真藤 健一		7760	森下 靖夫		7131	大鹿 ツ・ウ	
6259	小倉寛太郎		4743	長沢 悟		6610	盤指 敏詮	山 陰	7769	ナヤルフ オルフガング	
6319	小倉 正高		5849	草薙 信行							
6347	依田 雄弘		6312	川合 忠							
6375	江淵 繁男		7077	田中 政敏							
6390	今井 忠良		7834	越前谷幸平							
6438	若月 義正		7608	高橋 時夫							
6540	笠井 芳郎		7798	本間 功							
6681	都築 威男		5015	熊谷 政							
6697	仲田 明也		6088	佐藤 信夫							
6713	橋本 正明		5149	村上山岳会							
6846	泰磨 徹		2547	昭和電工(株) 大町工場山岳部							
6873	玉虫 誠										
6896	加藤 正巳		7577	金井 昭吾							

三月の三水会

昭和五十二年三月十六日、ルームにおいて「冬山に地酒を探る」というテーマでおこなった。係は星野重、石田稔郎である。

係としては、それらしい地酒と肴を少々用意すれば、話のきつかけとなると考えていたが、参加された方々が、自慢の品を持参されたので、充分に楽しむことが出来た。

この催しに何人の参加があるかと心配していたが、十数名という多数の参加があり、盛大な集りとなった。



なり、各地の地酒の話しをうかがうことが出来た。が、何分、準備期間が少なかったもので、内容が濃い所まではいかなかった。次回、東京の地酒をはじめ、銘酒を集めることにしたいと考えています。関心をお持ちの方は、ぜひ参加していただきたい。

参加の方々は次のとおり。山崎(安)、坂倉、今井(喜)、沼倉、中川(恵)、片岡、西丸、成瀬、菅野(弘)、松田、折井、勝田、斎藤

(桂)、星野、池田(智)、進藤、高田、石田、桐生、加藤(隆)、佃、岩佐、斎藤(健)。以上二十三名 (石田記)

雪崩研究会

遭難対策委員会
指導委員会

雪崩による遭難が跡を絶たない。登山行動中の判断のうちに、雪崩のそれは最も難しいものの一つであるが、現実にはそうした高度の判断に失敗して事故に至った例は少なく、ほとんどが初歩的遭難に過ぎない。まことに残念である。

本会としては従来より雪崩遭難

報告とお知らせ

予防の重要性を考え、冬山シーズン前には雪崩に関するシンポジウム、講演会などを行ない、ある程度の効果を収めて来たのであるが、あまり多くを期待することはできなかった。

そこで昨年度からは、繰りかえし十分の時間をかけた研究会方式に切替え、少数の参加者ではあったが、大体において予期の収穫を得ることができた。本年度は前年の経験を踏まえて、一層の発展を期待している。

申込要項

(1) 参加資格
現役登山者またはその指導者
積雪期登山を四シーズン以上経験した人

遅刻、欠席のない人

(2) 開催要領
雪崩の予備知識の有無は問わないが、宿題を確実に実行する人

(3) 開催要領
月一、二回、ルームにおいて、午後七時頃から
内容としては雪崩の物理的諸問題、登山者心理、遭難予防のテクニック、遭難の処理、現地研修会

(4) 申込
人員 一五名
申込書に住所、氏名、年令、電話、所属山岳会を明記のこと

(5) 参加費 三千元
(世話人代表金坂一郎)

会務報告

4月理事会

(4月8日午後六時半 本会ルーム)

▽出席者 織内、望月各副会長、浜野、高遠、山本健、小倉、大森、皆川、大倉、黒石、橋本、浅田各理事、太田監事、小原、浜野、折井、宮下各評議員
委任 今西会長、近藤、神崎各理事

▽議案

・総会提出議案について審議
・昭和51年度事業報告および財産目録、収支決算承認の件 (高遠) 承認

・昭和52年度除籍の件 (浜野) 承認

・本会のルームおよび図書室購入と、そのための資金の一部を長期借入金とする件 (浜野) 承認

・定款一部改正、52年度事業計画および収支予算(案)、役員候補者の件 (浜野) 承認

・上高地山岳研究所利用料金改訂について (小倉) 承認

宿泊料 会員一〇〇〇円を一五〇〇円に、非会員二三〇〇円を二五〇〇円に、小学生八〇〇円を一〇〇〇円に、子供五〇〇円を八〇〇円にする。今年度より

5月14日開所

承認

▽報告事項

・シフトン死去について弔電を打った (浜野)

・学生部 (浅田)

・ドウナギリ登頂の記録映画を4月21日本会ルームで映写 (橋本)

・青年懇談会 (橋本)

3月26日に西丹沢で懇親会を開催

・婦人懇談会 (黒石)

3月30日に新委員決定

ルーム日誌 (52年4月)

4日(月) 集会委員会

5日(火) 山岳編集委員会

8日(金) 評議員会、理事会

11日(月) 集会委員会

12日(火) 会計監査

13日(水) ルーム委員会

18日(月) 集会委員会

19日(火) 雪崩研究会

20日(水) 三水会

21日(木) 学生部

22日(金) 昭和52年度通常総会 (全電通会館)

25日(月) 集会委員会、山研委員

26日(火) 会報委員会、書評委員

会 今月の来室者307名

会員異動

退会者 七六〇七 中島 睦美(52・3・

31)

七三八二 山口 司(52・3・31)

名義変更 六九二四 市川 優(長坂)

支部変更 五〇一二 浜中 康栄(海外)

五〇七一 植西 武司(〃)

七九一〇 丸尾 裕司(その他)

六九八〇 山川三千雄(東京)

三五五八 北海道大学体育会山岳部(北海道支部)

物故者 七五七四 五十嵐 寛(52・3・

一〇四一 川田 多市(52・2・

休会者 七一九九 小泉 英明(52・4・

14)

夫婦会員 岩間 竹・むつみ

野村 宏・典子

鳴原 佑・洋子

佐伯 郁夫・克美

牧野 四子・吉文子

今井 雄二・喜美子

小原 勝郎・晴子

向後 元彦・紀代美

横田 茂雄・絹子

中世古隆司・直子

前岡 志郎・岑子

梅本 靈邦・知栄子

福田 文二・光子

若林 啓之助・妙子

渡辺 文仁・節子

松永 敏郎・康子

久野 英一郎・英子

羽賀 克己・育子

滝口 脩・操

小倉 茂暉・董子

芳野 赴夫・菊子

松田 雄一・柳子

吉田 満・三智子

山本 聖二・正子

ガルワール・ヒマラヤ登山隊員募集

高所登山委員会

高所登山委員会は、昨年のパミール登山隊につづいて今年秋、ガルワール・ヒマラヤ登山隊(隊長原真)を組織し、隊員を日本山岳会会員より公募する。

計画概要

△目的▽一、初・中級登山家のためのヒマラヤ登山入門(登山班)二、ガルワール・ヒマラヤの高地旅行(トレッキング班)
△期間▽24日間(一九七七年九月二十二日～十月十五日)
△地域▽東ガルワール、タルコツト峰(六〇九九メートル)及びその衛星峰
△隊の構成▽隊長・原真(医師・40歳)ほか隊員25名、高所医学担当医師1名、総務・伊藤行人、講師数名。

△募集人員▽25名(申込み順)
△費用▽登山班 54万円、トレッキング班48万円(いずれも往復交通費、現地滞在費、共同装備費などを一切含む)

△申込締切▽七月十五日

△登山隊事務局▽〒450名古屋市中村区堀内町四一 ホテル・ニュー

ナゴヤ七四七号 日本山岳会ガルワール・ヒマラヤ登山隊 電話〇

五二一五八三三〇七四七(エアーインディア内)

この隊の第一の目的は、初・中級登山者のためのヒマラヤ登山入門で、短期間で安価にヒマラヤ六〇〇〇メートル級の登山をおこなう。日本出発から帰国まで24日間の軽遠征隊だが、六〇〇〇メートルの高度、シェルパ、ポーター、リエゾン・オフィサー、キャラバンなどヒマラヤ登山の基本条件をすべて含む。

詳細問合せは前記事務局へ。

△追悼▽

永年会員中原万次郎氏は五月十四日、富士山大沢崩れで逝去されました。
沢田武志氏(三〇一二)は浅草岳より帰宅後の六月六日早晩、心臓麻痺のため急逝されました。つつしんでご冥福をお祈り致します。

昭和五十二年六月二十日発行

113 東京都文京区湯島一六六一

利根川商事株式会社

発行所 社団法人 日本山岳会

発行者 今西 錦司

編集代表 大森 久雄

(813)二八六(代表)

振替口座東京三三九四二九番

印刷所 株式会社 技報堂

登山・スキー用具専門店

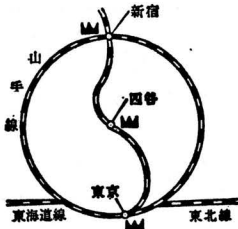
●買いやすい
山の店

山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736

●北へ来たら
山の店

●フレッシュな
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432・1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560・8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店



山友社 **たかはこ**

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680



かたろぐシンティ
でんや 281-8456
中央区・八重洲4の1

香山荘

登山とスキー一具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座3-5-7 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座3-4-6 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曽根崎上1丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 3440



好評／坂本直行の本

わたしの草と木の絵本

B変型判一四〇頁定価一、二〇〇円千四〇〇円
素朴な子供の詩心をそっとくみとった詩情豊
かな美しいスケッチと、絵に添えられた説明
文からは、土のにおいが漂ってくるようです

雪原の足あと

▲画文集▼

B五判二〇六頁定価三、八〇〇円千四四〇円
(特製本二五、〇〇〇円) 原画花の絵(淡彩2
号)付直接お茶の水店へ
雪消えとともに、原野や樹林地は、文字通り
の百花らん漫の花園となり、僕をよろこばせ
た。野草の姿の美しさは、僕の心をとらえた

原野から見た山

▲画文集▼

B五判一四四頁定価四、二〇〇円千四四〇円
右手の柏の樹林の上には南日高の山群が、と
んがった美しい起伏を見せていた。僕は歩
きながら先にスケッチブックを取り出して……

山・原野・牧場

▲ある牧場の生活▼

A五判一六〇頁定価一、五〇〇円千三六〇円
原野に第一歩を踏み出した若き日の著者の生
活記録であり、数多い直行ファンを魅了して
やまぬ絵と作品の湧き出づる源がここにある

開墾の記

A五判二三〇頁定価一、四〇〇円千三六〇円
あのすさまじい重労働と貧乏に耐えて過した
三〇年は、何によって支えられたのだらうか
……それは私をとりまく自然の美しさと

淡彩画絵はがき

▲北海道の山・原野・花▼

好評の1集に続き、2集が出ました。
1集「桐の実・初冬の中部日高・むしやりん
どう・まゆみ・おおめした・大雪山黒岳」
2集「えぞしゃくくえげ・はまばうふうの種・
初冬の利尻富士・えぞふうろう・ふきのとう
・五月のトムラウシ山」

茗溪堂

■出版目録送呈■お買上げ、ご注文は最寄り書店をご利用下さい。
〒101 東京都千代田区神田駿河台2の1 電話03-291-9442 振替東京8-24723